

教育研究業績書

2017年05月29日

所属：日本語日本文学科

資格：教授

氏名：木下 りか

研究分野	研究内容のキーワード
日本語学	意味論, 文法論
学位	最終学歴
博士 (学術)	名古屋大学大学院 文学研究科 博士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2017年度	「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクトの共同研究員
2. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2016年度	「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」プロジェクトの共同研究員
3. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2015年度	「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」プロジェクトの共同研究員
4. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2014年度	「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」プロジェクトの共同研究員
5. 国立国語研究所プロジェクト共同研究員	2013年度	「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」プロジェクトの共同研究員
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 『認識的モダリティと推論』（科学研究費出版助成刊行物）	単	2013年3月	ひつじ書房	認識的モダリティの体系的な意味研究である。本書の分析を貫くのは、非現実世界の認識に推論が介在するという視点である。これにより、一般に人間の認識や思考を支えるとされる演繹・帰納等の推論の型、類似性・隣接性等の関係性が、認識的モダリティ形式の意味に塗り込まれているさまが詳述される。
2. 『現代を生きるキーワード』	共	2012年9月	大阪公立大学出版会	「正しい日本語」という概念は多義的であり、1) コミュニケーションに便利な共通のことば、2) 共通のことばではなくとも自分の話すことば、3) 政治的・経済的に力を持つ者のことば、という意味で使われている。「正しい日本語」ということばを口にすると、どの意味で「正しい」と言うのかを常に意識する必要がある。 編者：鈴木利章 担当部分：「正しい日本語」 pp. 56-60
2 学位論文				
3 学術論文				
1. 多義語の多角的アプローチ（査読付）	共	2016年6月	『日本認知言語学会論文集』第16巻 pp. 524-529	日本語、韓国語、英語の分析を通して、多義語分析の課題としてあげられる以下の点について考察を行うことを狙いとする。(1) (それぞれ確立した) 複数の意味(多義的別義)の認定(2) プロトタイプの意味の認定(3) 複数の意味の相互関係の明示(4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明(初山(2001))

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 引用節を伴う思考動詞の多義性をめぐって—思考主体の役割と意味拡張— (査読付)	単	2016年6月	『KLS』36号 pp. 25-36	初山洋介、李澤熊、木下りか、有菌智美 担当部分：「認識的モダリティ形式の多義性と認知領域—「認識」から「是認」への意味拡張」 引用節を伴う思考動詞「思う」の意味特徴が、引用節の特徴と思考行為動詞としての「思う」の特徴から合成的に把握できることを示し、その上で、Langer (2006など) のステージモデルを採用し、引用節の場における思考主体の主体化の度合いにより、多義的に意味拡張することを明らかにする。
3. Content Domain における含意関係と認識世界の広がり—「広義原因」の認識表示と「だろう」— (査読付)	単	2015年6月	『日本認知言語学会論文集』第15巻 pp. 45~56	「だろう」は一般に、何らかの事態の原因を推論した結果を表示するのには適さないとされる。しかし因果関係をContent Domain における含意関係と捉えるならば、原因を推論した結果を表せる場合がある。本論文はこの条件について考察を行い、「だろう」が「動的進展モデル」における「力」の向かう方向へ広がった認識世界を表示することを示す。
4. 「呼応」における陳述副詞の機能—「たぶん」と「だろう」の場合— (査読付)	単	2015年4月	『表現研究』101号 pp. 31~40	副詞のいわゆる「呼応」現象については、副詞と呼応する文末形式との「陳述」の仕方の類似性が指摘されてきた。しかし、「呼応」によってもたらされる意味についての考察は、手つかずのままであったと言える。本稿は、「たぶん」と「だろう」が共起すると「蓋然性」の程度を下がる現象を記述し、各々の意味からその理由を説明する。それにより陳述副詞の持つ「修飾」(山田 1936) 機能の一端が明らかにする。
5. 好像に対応するモダリティ形式 (査読付)	単	2012年6月	『台湾日語教育学报』18号 pp. 173~202	認識的モダリティ形式「そうだ」は、中国語では「好像」と訳されることが多い。「ようだ」も同様であり、両形式の相違は日本語学習者にとって理解が困難である。これらの形式の使用場面を、時空は離れていても本来知覚可能な事態について述べる場合と、高次の認識内容について述べる場合の大きく二つに分け、さらに下位分類を行って詳細に比較検討し、文脈ごとの置き換え可能性と、互換可能な場合の意味の相違について記述を行った論考である。
6. 推論の多義的解釈—認識的モダリティ意味記述のメタ言語—	単	2012年3月	『大手前大学論集』13号 pp. 125~138	認識的モダリティ形式の意味記述には、しばしば推論というメタ言語が用いられてきた。本稿は、推論というメタ言語がどのように用いられてきたかを整理し、概念のずれを指摘する。その上で、認識的モダリティの意味記述に際し、推論という用語をどのように定義して用いるのが妥当かを論じ、用語の使用に関する提案を行う。
7. Content Domainにおける含意関係を遡るふたつの推論 (査読付)	単	2012年3月	『認知言語学会論文集』12巻 pp. 259~271	「ようだ」「らしい」の意味を記述することを目的とした論考である。従来から指摘されているように、「ようだ」「らしい」は極めて類似度の高い意味を持ち、その共通性は証拠という概念で括られてきた。本稿は、証拠という概念が、Content Domain における含意関係をさかのぼる推論と関連で概念規定可能であることを示し、その上で、両形式の相違は、その含意関係の捉え方の違いにあることを論証する。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 文学テキストと認識的モダリティ形式—形式の選択と使用から見えるもの—	単	2017年6月 (予定)	2017年度表現学会全国大会シンポジウム「文法論と表現論」	
2. 学会発表				
1. The polysemy of hazuda in Japanese	単	2016年9月	日本語教育世界大会 (I CJLE) 於バリ：インドネシア	The purpose of this research is to describe the polysemy of “hazuda”. It is generally assumed that “hazuda” is used to express two meanings: “ninshiki” (epistemic modality) and “natoku” (assert). However, “hazuda” is sometimes used to mean “jyooho” (concession). Focusing on this usage, this paper describes the meaning of “jyooho” by comparing with the epistemic modality usage. The description shows that the feature of “jyooho” is a result of metaphorical mapping from the epistemic usage.
2. 「かもしれない」の新たな用法と間主観性	単	2016年11月	第11回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 於 公開大学：香港	「かもしれない」は、話者の願望を表す「～たい」に後接する新しい用法を持つ。本発表は、この用法の意味機能が、「フェイスへの配慮」「不確かさの表示」という従来の記述では説明しきれないことを示し、表出者としての自己の把握のありさまという観点から捉えなおす。その上で、この意味変化を言語の普遍的变化の方向性の中に位置付ける。
3. 多義語への多角的アプローチ	共	2015年9月	日本認知言語学会第16回全国大会	日本語、韓国語、英語の分析を通して、多義語分析の課題としてあげられる以下の点について考察を行

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
4. 引用節を伴う思考動詞の多義性をめぐって—思考主体の役割と意味拡張—	単	2015年6月	於 同志社大学 関西言語学会第40回記念大会 於 神戸大学	うことを狙いとする。(1) (それぞれ確立した) 複数の意味 (多義的別義) の認定 (2) プロトタイプの意味の認定 (3) 複数の意味の相互関係の明示 (4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明 (初山 (2001)) 初山洋介、李澤熊、木下りか、有菌智美 担当部分: 「認知的モダリティ形式の多義性と認知領域—「認識」から「是認」への意味拡張」 引用節を伴う思考動詞「思う」の意味特徴が、引用節の特徴と思考行為動詞としての「思う」の特徴から合成的に把握できることを示し、その上で、引用節の場における思考主体の主体化の度合い (Langaker 2006など) により、多義的に意味拡張することを明らかにする。
5. Content Domain における含意関係と認識世界の広がり—「広義原因」の認識表示と「だろう」—	単	2014年9月	日本認知言語学会第15回全国大会 於 慶応大学	「だろう」は一般に、何らかの事態の原因を推論した結果を表示するには適さないと言われる。しかし因果関係をContent Domain における含意関係と捉えるならば、原因を推論した結果を表せる場合がある。本論文はこの条件について考察を行い、「だろう」が「動的進展モデル」における「力」の向かう方向へ広がった認識世界を表示することを示す。
6. 学習者の認知的モダリティ使用傾向と日本語教育文法の課題	単	2014年7月	日本語教育世界大会 (ICJLE) 於 シドニー工科大学: オーストラリア	習得が進みにくいとされる認知的モダリティの使用実態を明らかにするために、学習者の作文を分析する。先行研究では量的な視点からの分析が行われており、モダリティ形式の非用傾向の強さと、形式による使用頻度の差異が指摘されている。本発表は質的な観点からの分析を行い、推論の方向性に関する誤りが散見されること、そこから日本語教育文法の見直しの必要性が示唆されることを述べる。
7. 認知的モダリティの誤用と非用—日本語学習者の意見文作成上の課題—	単	2014年11月	日本語教育・日本語研究シンポジウム 於 香港大学	中国語を母語とする日本語学習者と、日本語母語話者の意見文における認知的モダリティの使用を比較分析し、学習者の認知的モダリティの誤用と非用を質的側面から考察する。その結果、認知的モダリティの体系的な意味把握が教授上の重要な課題となる可能性が明らかになる。また、語彙・構文の母語からの転移によって、未習得が顕在化しない場合があることが指摘される。
8. 「はずだ」と発話の理由提示	単	2012年8月	日本語教育研究世界大会 (ICJLE) 於 名古屋大学	「はずだ」は、認知的モダリティとして非現実世界について語る用法の他、不可解な事態の存在する理由を知って、なぜその事態が起こっているのかを納得する用法を持つとされる。本発表は、「はずだ」にはこの他に、発話の正当性を主張する用法もあることを指摘し、これらの用法間の関連性について考察を行う。「はずだ」は推論の帰結を表示し、その推論が認識領域で成立するか発話行為領域が多義的な意味の広がりにつながっていると考えられる。
9. 認知的モダリティと副詞	単	2012年12月	台湾日本語研究国際学術シンポジウム 於 静宜大学: 台湾	副詞「たぶん」は「だろう」との共起頻度が高い。この特徴はしばしば呼応と呼ばれてきた。しかし「たぶん」と「だろう」は意味的に近似し、文末に「だろう」が来る場合 (例: たぶん彼も来るだろう。)、 「たぶん」が用いられる必然性は見えにくい。本発表は、「たぶん」を誘導副詞 (渡辺 1978) と捉える立場に立ち、文末予告を必要とする文脈の特徴について、書き言葉均衡コーパスを用いて記述を行い「たぶん」の機能を明らかにした。

3. 総説				
1. 『基本動詞ハンドブック』	共	2017年3月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分) 「張る」の18の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
2. 『基本動詞ハンドブック』	共	2016年5月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分) 「なる」の15の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
3. 『基本動詞ハンドブック』	共	2016年5月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用の

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3. 総説				
4. 『基本動詞ハンドブック』	共	2016年3月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	ネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「言う」の13の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
5. 『基本動詞ハンドブック』	共	2015年3月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「打つ」の17の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
6. 『基本動詞ハンドブック』	共	2015年1月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「思う」の15の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
7. 『基本動詞ハンドブック』	共	2015年1月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「触る」の12の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例のほか、慣用句、複合語などを示している。
8. 『基本動詞ハンドブック』	共	2014年4月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分)「～ていく」7つの多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例や慣用句、複合語などを示している。
9. 『基本動詞ハンドブック』	共	2014年4月	国立国語研究所 http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/	文の骨格を決める重要な一要素である動詞について、認知言語学や対照言語学など様々な研究分野の最新の知見を取り入れて編纂された日本語学習者用のネット版辞書である。コーパスに準拠して語義ごとにコロケーションや意味拡張を示し、視覚コンテンツを導入するなど、従来にない詳細な記述を提供している。(担当部分:「行く」22の多義的別義とその相互のネットワーク、別義ごとに生じやすい誤用例の他、慣用句、複合語などを示している)
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 視点の共有化による共感の形成—「かもしれない」の新たな用法をめぐって—	単	2016年8月	第14回日本語教育研究会 於：名古屋大学	比較的若い世代の用いる「かもしれない」の新たな用法について、従来の研究では、ポライトネス理論の観点からネガティブポライトネスとして機能することが指摘されてきた。本発表は、この用法は、共感形成の表現であり、ポジティブポライトネスとして機能することを指摘する。
2. 語義の認定をめぐって—別義の立て方と第一義の認定—	共	2016年3月	基本動詞ハンドブック 全体会議 於 松本商工会議所	辞書の記述にあたって、多義語の第一義を何とするかは重要な問題である。第一義としては、多義的別義のうち「概念的中心性」あるいは「機能的中心性」(松本(2009))を持つものが候補となるが、これら二つの中心性が一致しない語がある。その場合、旧来の辞書であれば、「機能的中心性」を優先する傾向が強いが、多義語意味記述において、別義間の意味的関連性の記述が重要な課題となることを踏ま

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
3. 多義語への多角的アプローチ	共	2015年8月	現代日本語学研究会 於 名古屋大学	えれば、「概念的中心性」を第一義とすることに重要な意義があると言える。木下りか、李澤熊 担当部分：第一義の認定について
4. モダリティ形式化した思考動詞の機能—思考する自己の客体化—	単	2015年8月	日本語教育研究会 於 名古屋大学	日本語、韓国語、英語の分析を通して、多義語分析の課題としてあげられる以下の点について考察を行うことを狙いとする。(1) (それぞれ確立した) 複数の意味 (多義的別義) の認定 (2) プロトタイプの意味の認定 (3) 複数の意味の相互関係の明示 (4) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明 (初山 (2001)) 初山洋介、李澤熊、 <u>木下りか</u> 、有菌智美 担当部分：「認識的モダリティ形式の多義性と認知領域—「認識」から「是認」への意味拡張」
5. 学習者の作文コーパスにおける認識的モダリティ—母語話者との比較—	単	2014年8月	第12回日本語教育研究会 於 名古屋大学	引用節を伴う思考動詞「思う」の意味特徴が、引用節の特徴と思考行為動詞としての「思う」の特徴から合成的に把握できることを示し、その上で、Langer (2006など) のステージモデルを援用し、引用節の場における思考主体の主体化の度合いにより、多義的に意味拡張することを明らかにする。
6. 「だろう」と「広義原因」の認識表示—名詞述語における叙述のタイプとの関連性—	単	2014年10月	第146回 現代日本語学研究会 於 名古屋大学	中国語を母語とする日本語学習者と母語話者の意見文における認識的モダリティの比較分析を行った。その結果、意見文作成上、使用頻度が高い認識的モダリティ形式は「だろう」「と思う」であり、「だろう」については推論の方向性に関する誤用が多いこと、また、意見文の文体が、母語からの転移を目立たなくしている場合が多いことが指摘された
7. いわゆる副詞の呼応とテキストの結束性	単	2013年8月	第11回日本語教育研究会 於 名古屋大学	人は何らかの事態の結果がどうなるのかを推論することも、原因が何であるかを推論することもある。本発表は、認識内容が名詞述語で表される場合に、「だろう」が広義の原因表示できる条件について考察を行う。その条件は、叙述のタイプと深い関連を持ち、名詞述語が時間的限定性の低いタイプの場合であること示す。
				副詞「たぶん」は「だろう」との共起頻度が高い。この特徴はしばしば呼応と呼ばれてきた。しかし「たぶん」と「だろう」は意味的に近似し、文末に「だろう」が来る場合 (例：たぶん彼も来るだろう。)、 「たぶん」が用いられる必然性は見えにくい。本発表は、「たぶん」を誘導副詞 (渡辺 1978) と捉える立場に立ち、文末予告を必要とする文脈の特徴について、書き言葉均衡コーパスを用いて記述を行い「たぶん」の機能を明らかにした。
6. 研究費の取得状況				
1. 科学研究費 (基盤研究 C) 16K0274	単	2017年度		日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究
2. 科学研究費 (基盤研究 C) 16K0274	単	2016年度		日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究
3. 科学研究費 (研究成果公開促進費 学術図書) 245073	単	2012年度		『認識的モダリティと推論』 (ひつじ書房)

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2008年4月	表現学会
2. 2000年4月	日本認知言語学会
3. 2000年4月	日本語文法学会
4. 1996年7月	関西言語学会
5. 1996年4月～2016年3月	日本語教育学会
6. 1996年4月	日本語学会